

# 令和6年 高知県橋梁会 現場見学会 報告書

高知県橋梁会  
片山 直道

## 1. はじめに

高知県橋梁会では、技術研鑽及び会員同士の懇親を目的に、昭和63年から現場見学会を毎年行っている。近年はコロナ禍の影響があり令和元年を最後に中止していた。本年度は、5年ぶりの開催となり、16名の参加者にて10月18日から19日の1泊2日で、福岡県北九州市にある若戸大橋を主に見学した。

旅程は、1日目に高知空港から福岡空港へ降り立ち、下関へと移動し、昼食をとり若戸大橋を見学した。宿泊は、福岡市内であった。2日目は、太宰府、柳川を観光した後、福岡空港から帰路についた。

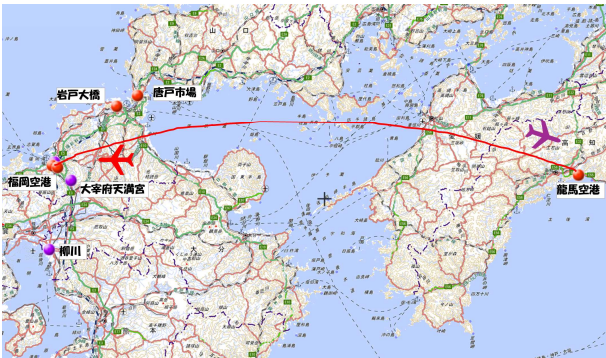


図1 主な訪問先箇所

## 2. 旅の始まり～昼食

一行は、飛行機にて高知龍馬空港から福岡空港へと出発した。福岡空港に到着後、東京発、松山発の参加者と合流し昼食会場である唐戸市場へ貸し切りバスで移動した。

移動中、バスガイドがない代わりに、運転手が車窓から見える主要スポットの説明をしてくれた。奇遇にも、運転手は長い間橋梁架設の仕事に携わり、高知道の工事にも従事した方であった。



写真1 見学会の盛会を祈願する右城会長の挨拶

唐戸市場に到着すると、デザイン性の高い連絡橋が目飛び込んできた。テンセグリティ構造を応用した形式となっており、周辺にもなじむ景観である。

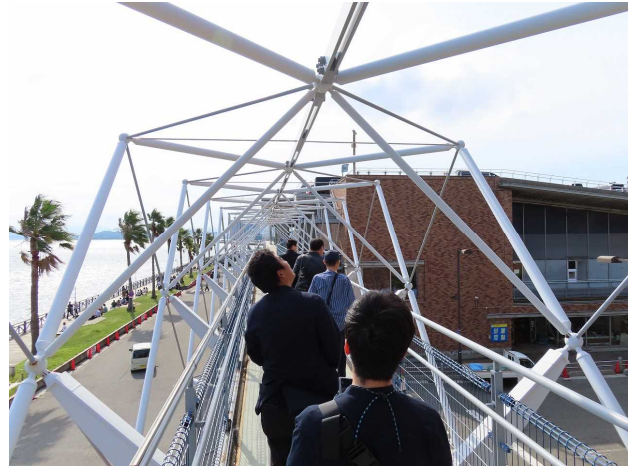


写真2 連絡橋を観察する様子

連絡橋を観た後、各自が市場内で昼食をとった。市場では、新鮮な魚の握り寿司などがあり、下関の魅力を堪能した。



写真3 市場内の様子

## 3. 若戸大橋の見学

昼食後、見学会の目玉となる若戸大橋へと向かった。道中関門海峡に架かった関門橋を間近に見ることができる壇之浦パーキングエリアへ立ち寄った。敷地内に設置された展望広場は、関門橋の真下に設置されている。そこでつかの間の休憩をとった。ハンガーロープが小さいことや主索が細いことなど、自然と参加者同士の議論が始まった。関門橋は、この後見学する若戸大橋を参考に、1973年に架けられた当時日本及び東洋最長の吊橋である。若戸大橋と関門橋は、後に架けられる明石海峡大橋など国内の長大橋の先駆けとなった。



写真4 関門橋をバックに記念撮影

若戸大橋では、若松側橋台内部に設置された「若戸大橋50周年記念展示室アンビュレッド・ブリジウム」を見学した。展示室でまず、若戸大橋の歴史を取りまとめたビデオを鑑賞した。昭和30年代の先人たちが、無数のリベットを設置する様子や、主塔の傾きを8mm（高さ84m当たり）以内に収めるための施工状況などを垣間見ることができる貴重な映像であった。日本の長大吊り橋の先駆的となる若戸大橋であるが、設計の妥当性を確認するため実際に車両を走行させる載荷試験の様子が収められていた。この時代の技術者たちは、探求心と責任感が非常に強いと感じた。感銘を受けるとともに、橋梁に関わる技術者として強く尻を叩かれる思いであった。

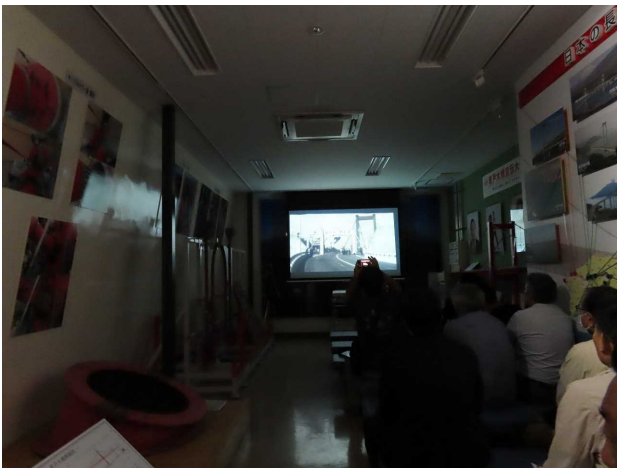


写真5 若戸大橋のビデオ鑑賞

ビデオを鑑賞後、北九州市の職員の方による案内で展示室を見学した。ここには、平成2年に完成した車道拡幅工事により撤去した部材が飾られていた。また、建設当時の図面や模型なども見ることができた。

北九州市の職員の方からは、建設当時の状況や、現在行っている総工事費約90億円の塗替え塗装工事に関して説明していただいた。



写真6 撤去した部材の見学の様子



写真7 北九州市職員の方による説明

展示品を見学後、特別にアンカレッジの湿度管理室を見学させていただき、アンビュレッド・ブリジウムを後にした。



写真8 若戸大橋をバックに記念撮影

若戸大橋を見学後、若戸大橋の直下を横断する若戸渡船に乗船するため船着き場へと向かった。道中、参加者たちは仕切りに上を見上げ、現在の長大吊り橋の先駆けとなった橋梁の構造について議論する姿が見られた。



写真9 移動中の見学の様子

乗船後は、普段見ることのできない渡河部の状況や現在工事中の塗替え塗装工事の様子を眺め、若戸大橋の見学を終えた。

今回の見学会では、時間の都合上点検時に使用する歩廊や主塔内部の見学は叶わなかった。そんな中でも貴重なビデオや展示品を見ることができ有意義な時間となった。是非とも再度訪れ、今回見ることのできなかった場所の見学を行ってみたいものである。なお、主塔内部やケーブル上の足場からの景色がバーチャルツアーで閲覧できる動画を北九州観光コンペション協会が公開しているため是非ともご覧いただきたい。

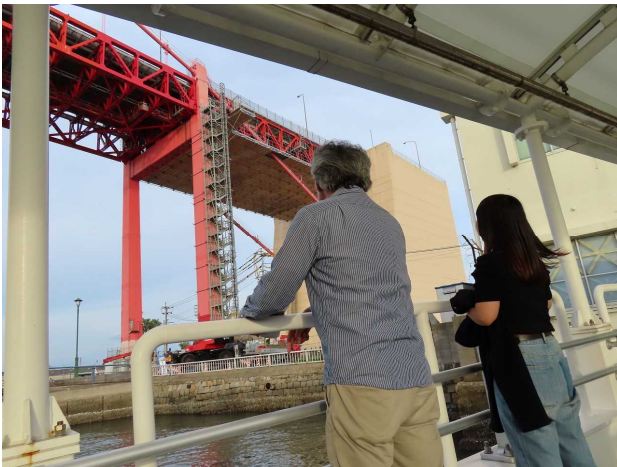


写真10 工事中の若戸大橋を見学

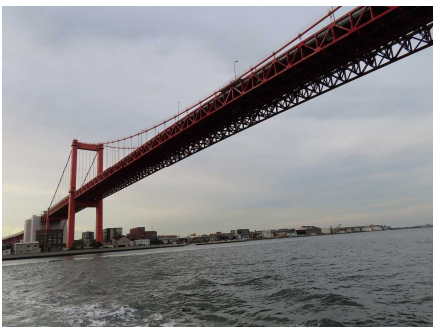


写真11 船上から見る若戸大橋



#### 4. 大宰府天満宮

二日目最初の観光地、大宰府天満宮へと向かった。国の重要文化財に指定される太宰府天満宮は、学問の神様菅原道真公が祭られている。参加者たちはそれぞれ、いろいろな思いを胸に参拝を行った。

参道を社殿に向かって歩くと、太鼓橋、平橋、太鼓橋の3つの橋が心字池を渡河している。3つの橋は、過去・現在・未来という仏教思想に基づく三世一念を表している。過去を振り返らず、現在を立ち止まらず、未来を躓かずに渡りきることで、参拝者の邪念を払い、身を清める橋として設置されている。



写真12 石で構築される太鼓橋

始まりは、地元福岡の藩主黒田長政が寄進したといわれている。太鼓橋は、石造りとは思えぬ接合で非常に高度な技術が集結した石橋である。現存の橋は、御神忌1100年大祭(平成14年)に向けて平成3年に大改修が行われた。高欄には、石匠の名前が刻まれていた。



写真13 石匠の名前が刻まれた橋銘板



写真14 参拝の様子

## 5. 柳川～博多の観光

太宰府天満宮を後にし、柳川市へと向かった。柳川では、旧柳川城の城壕を遊覧するお濠巡りをを行った。柳川の川下りといえば、船頭の橋越えパフォーマンスが有名である。また、お堀周辺は四季折々の景色がみられる。我々は、秋の景色や船頭の橋越えを楽しみに乗船場へと向かった。

乗船場に到着後、注意事項を聞いている最中突然の雨に晒された。遊覧中は雨がやむことを期待し、ポンチョを羽織り乗船した。城壕には、木橋やコンクリート橋など様々な橋が架っており、体がかがめ橋の下を潜るのは初めての体験であった。遊覧中、刻々と雨脚が強くなってきた。景色を十分に堪能することはできなかったが、それもまた貴重な経験であった。



写真 15 橋を潜る様子



写真 16 柳川名物鰻のせいろ蒸し

川下りを終えた一同は、昼食会場に移動し地元名物うなぎのせいろ蒸しを堪能した。

昼食を終えると、バスで博多に戻り、旅の締めくくりである「博多の食と文化の博物館ハクハク」へ向かった。ここでは、博多の食明太子の製造工場を見学し、オリジナルの明太子作りを体験した。



写真 17 明太子づくり体験の様子

## 6. 高知へ

全ての旅程を終了し、帰路につくため福岡空港へと向かった。到着後、二日間案内をしてくださった運転手の中村さんに別れを告げ、高知、松山、東京それぞれの出発ゲートへと別れた。悪天候のためそれぞれの便が1時間遅延するアクシデントがあったが、皆が無事帰路につくことができ2日間の見学会を終了した。

今回の見学会では、現代の日本の橋梁工学の礎ともいえる若戸大橋の見学を中心に、日本の伝統が織りなす石造りの太鼓橋や、景観に配慮したテンセグリティ構造の連絡橋など、過去、現代それぞれの特徴を示した橋梁を見学することができた。メンテナンスが主流の現代においては、歴史的な橋梁の背景や実態を知ることは重要である。今回の見学会は参加者にとって非常に有意義な時間となった。

終わりに、近畿日本ツーリストの野村様、運転手の中村様のご尽力のおかげで、二日間無事に旅程をこなすことができた。また、北九州市役所 戸畑区役所まちづくり整備課 若戸大橋管理係長の國武様をはじめ、北九州市様には今回の見学のために展示室の公開や若戸大橋のご説明など大変にご協力いただいた。皆様に厚く御礼申し上げます。

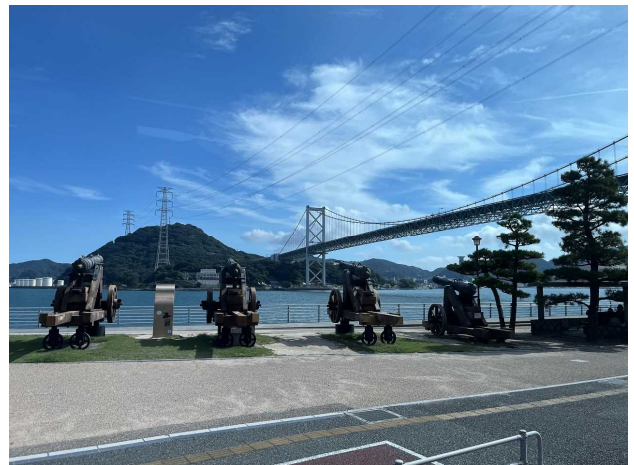


写真 18 関門橋と長州藩の砲台